

神社と悪人往生

——諏訪信仰の展開——

はじめに

諏訪大社の分祀・分霊は、東日本を中心に五千社余あるといわれている。その多くは八幡社・稻荷社・北野社などの著名な大社の分祀と同じように、地域の鎮守、住民の氏神として鎮座し、人びとを擁護している。⁽¹⁾

かつてわたしは、専修念仏の談義本の神祇信仰への対応を検討するにさいし、『神道集』所収「諏訪縁起事」における兵主大明神と三郎との関係に注目し、村落に勧請された諏訪社と住民との関係を説明したものであると指摘し、「氏子」の成立を論じた。また、「諏訪縁起」が製作された背景を、信瑞の『広疑瑞決集』の殺生祭神観と、諏訪本社における『法華経』信仰より考え、昨年、『国文学 解釈と鑑賞』九月号の「中世の『神』と文芸」の特集においては、三郎譚の成立を、殺生を職業とする人びとを対象とした鎮守神信仰の成立として評価すべきだと述べた。いずれも、紙数の限られた小論文であるため

史料の引用は重要なもの以外すべて省略している。⁽²⁾

よって本稿では、旧稿での検討が不十分であった「諏訪縁起」における衆生擁護の神道（鎮守神信仰）としての特色を中心に、諏訪信仰と『法華経』、諏訪社と親への孝養、諏訪信仰と殺生について考察することにした。

一 「諏訪縁起」について

1

「諏訪縁起」は甲賀三郎を主人公とする物語縁起であるが、はやく口承文芸として筑土鈴寛氏により注目され、異本の収集が行われ、横山重氏により『室町時代物語集』第二に翻刻紹介され、柳田国男氏は諸本が三郎の実名を諏方とするものと兼家とするものに分かれることより、諏方系と兼家系の二系統に分類された。そして、両系統の異同を信仰系統の違いだとされ、諏方とするものが先ず成立し、それを改変して兼家系が成立したと推定された。⁽³⁾

今堀太逸

諏方系は信州諏訪地方、兼家系は甲賀・伊賀地方を中心に鹿兒島地方においても伝写されているのであるが、福田晃氏により兼家系の諸本の採訪と書誌的な研究、ことに諏訪・甲賀・伊賀において甲賀三郎の物語を管理していた人たちの研究がなされたことで、この方面の研究が一段と豊かなものとなった。⁽⁵⁾その後、中世の本地物の研究を精力的にされている松本隆信氏により両系統の物語の内容の比較がなされ、松本氏は兼家系が古く、諏方系はその改作だと指摘された。⁽⁶⁾また、筑士氏以来の写本と系統に関する研究を整理された金井典美氏は、兼家系は諏訪神社下社系の神人たちがその信仰圏で成立させ、諏訪系は上社系の神人たちがその信仰圏に唱導した物語ではないかとし、先後関係では、松本氏と同じく兼家系が先に作られたという。⁽⁷⁾

両系統の先後関係について、本格的に論じる準備は今のわたしにはない。いえるのは、諏方系の『神道集』巻第十所収の「諏訪縁起事」(「神道集本」)が両系統の中で最も古い写本であり、後述するように、諏訪社が鎮守神として勧請された当初の写本の収録であると考えられること。その他の諸本は、全て十六世紀以降のものであり、「神道集本」より少なくとも二百年は後のものである。したがって物語の内容も、諏訪社が諸国に鎮守神として勧請されて、人びとに氏神であることが十分に認識されていることを前提として構成されている、ということである。

本稿では、「神道集本」以下両系統のつぎの諸本により諏訪信仰の特色を考察したい。⁽⁸⁾

諏方系

「天正本」……長野県茅野市茅野家蔵「諏訪縁起」。天正十三年(一五八五)書写の奥書。『諏訪史料叢書』巻二、『室町時代物語集』第二、『新編信濃史料叢書』第七巻等に翻刻。『室町時代物語集』第二の横山重氏の解題によると、茅野家は神楽をもって諏訪社に仕えた家で、同家には内題を「諏訪大明神御本地」とする安永元年(一七七二)の写本がある。横山氏は、「神道集本」を仮名書きすると、或は本書のようになるかも知れないと思われる程、殆ど同じ内容だと指摘される。

「寛永本」……京都大学図書館蔵「諏訪縁起物語」。寛永二年(一六二五)書写の奥書。『室町時代物語集』第二に翻刻。伝来不詳。柳田国男氏は「明らかに天正の諏訪本と同系統のもので、しかも其間僅かに四十年を隔てて居るに拘らず、明らかに転写の際の出来事とは認められない幾つと無き変化がある」と指摘している。⁽⁹⁾

「弘化本」……慶応大学斯道文庫蔵「諏訪草紙」。弘化四年(一八四七)書写の奥書。近世後期に信州で伝写された一本で、『室町時代物語大成』第八巻、金井典美『諏訪信仰史』に翻刻。元の後表紙の裏に「信州水内郡長井邑酒井栄作」とみえる(『大成』解題)。

兼家系

「天文本」……鹿兒島県石川タモ氏蔵「諏訪御由来之絵縁起」。兼家系の最も古い写本で天文十二年(一五四三)書写絵巻。上巻奥書に「于時天文十二年癸卯十月八日、大隅国箇羽野村於新山寺、諏訪御由来之絵縁起、為末代之興隆書写了」とみえる。寺師三千夫・福田晃氏が伝承文学研究会編『神道物語集(一)』(三弥井書店、昭和

四十一年）に翻刻紹介。

「望月本」……滋賀県甲賀郡望月善吉氏藏「諏訪の本地」。江戸末期写本。巻末に大岡寺の縁起を記す。福田晃氏が『伝承文学研究』第二号（昭和三十七年）に翻刻紹介。福田氏によると、写本の原本と思われるものが一丁分あり、その書写年代は元禄以前に遡ると思われるとのことである。

「吉田本」……吉田幸一氏藏江戸初期写本。内題・外題ともになく、巻末数丁が欠落。金井典美『諏訪信仰史』、『室町時代物語大成』第八巻に翻刻。

「赤木文庫本」……赤木文庫藏「すわの本地」。三巻一冊の絵入り江戸初期写本。『室町時代物語集』第二、『室町時代物語集』第八巻に翻刻。

「正保本」……臼田甚五郎氏藏正保三年（一六四六）写本。『続御伽草子』（桜楓社、昭和五十五年）に翻刻。三郎兄弟の住国を甲賀ではなく「伊賀国けてふの郡」とする。

2

諏方・兼家両系統諸本に共通するのは、三郎が「あら人神」であり、その本地を普賢菩薩だとすること。および、奥につきのような「諏訪縁起」を語り、聞くことの功德が記されていることである。

「天正本」

あひかまへて、これをちやうもんすへし、ふつちに、しんをいたし、三ほうをうやまひ、しひにちやうして、れひきをたゞしくして、けんたう二世の、くわんまうを、いのるへき物なり。すわ

神社と悪人往生

のちんひしよ、これをあそはし候はん人も、またちやうもんの人も、しやうしんけつさいあるへく候。ふしやうこゝろにしてむようなり

「寛永本」

かやうにかきしるし候へは、いかにもすはを御しんかう候はん人は、こんしやうをまほり給ふなり。このそうし、一たひ見たてまつらん人は、すわゑ三と参らんに、あたるへし。よく／＼御しんかうあるへし

「弘化本」

此書を、日に一度よめは、諏訪え日参りし給ふと、同じ事也。ぬふ、うたかへべからず。うたかいの心を持人は、ぶつせうにも、かなはず、神慮をそむきものなり

「天文本」

神は本地をあらはし申せは、三熱のくるしみをやすめおほしめすなり。あひかまへて／＼大明神をしんかうしたてまつる人は、同心に御本地をたつね聞、人々にかたりきかせて神徳をかふむるへきなり

「望月本」

神ハ本地ヲアラハシ申ハ、三熱ノ苦ヲヤスメ玉フ。相構テ大明神ヲ奉テ信仰参ン人ハ、同心ニ本地ヲ申ス。又人々モ、語り聞セテ神徳ヲ蒙ルヘキ也

「赤木文庫本」

しんは、ほんしをたつね申せは、三ねつのくるしみ、まぬかれ給

ふなれば、このまきものを、ないしんより、とりいたし、まいりの人に、よみきかせ、しんとくをかふむらせ給ふへし（略）こゝろあるも、こゝろなきも、この一くわんの、まきものを、きかは、ひかしにむかい、かつしやうして、らいはいせは、こんしやうにては、ちうふくをゑ、いのちをなく、しそんにさかえ、こしやうには、しやうしりんゑをはなれ、ちうさひをめつし、すみやかに、しやう仏ならんこと、あにうたかいあらんや、されは、このまきもの、日ほんに、四つありと、いゝけれとも、しんちん、なき人には、ひすへし、もしまた、しんちん、しよもふの、かたあらは、よみきかせ給ふへきものなり

「正保本」

神は本地をあらはしたてまつれば、五すひ三ねつのくるしみをのがれさせ給ふなり。さて、すはの大明神の御事、日本第一のふしぎなり。とうどてんぢくにも、かゝるためしはあるべからず。かの双橋よみたてまつれば、わが本地をあらはすとて、明神らひりんようがうし給ふなり。うたがひあるべからず

なお、「神道集本」に見えないのは、省略されたためだと思われる。

『神道集』巻第六「三十三 三嶋之大明神之事」の奥には、

神御本地申喜習也。若此御本地一度聞、随喜涙雨、必無間炎消滅。誓給、此双紙一度読人、三度詣同、況五度十度聞人。

とみえるし、巻第九「四十九 北野天神事」の序文にも

本地頭、喜眉忽開、威光弥倍給、願天満大自在天神、必納受垂、如意樂与、一度此唱輩置、毎日七度守誓、神自貴、人敬以貴、

人亦自安、神助依安治、心先、此読、耳傾此聴聞、所安穩、里繁盛、家天雨潤、火災難却、人殊病盜賊愁無、此則神恩人幸是也、誰人信心堅固誠至。

とみえる。この「天神縁起」の功德書は、「伝聞三葉葦海上ニ開ケシヨリ」で始まる語り物として発展した安楽寺本系統の諸本にみえる。

三郎の物語を通して諏訪社が衆生を守護するのにふさわしい神社であることを、人びとに説明することが、三郎譚製作の第一の目的であったことがわかる。諏方系と兼家系の功德書の相違点としては、諏方系では諏訪社参詣の利益との関係で諏訪大明神の神徳を説くのに対して、兼家系では縁起聴聞の功德は強調されるが、諏訪本社参詣の功德については記さないことである。

二 「諏訪縁起」と衆生擁護

1

「神道集本」を紹介しながら人と神と仏との関係を検討してみよう。

近江国廿四郡内、甲賀郡云処、荒人神頭御神、諏方大明神申、

此御神、応迹示現由来、委尋

という。甲賀郡の地頭甲賀權守諏胤には、太郎諏致、次郎諏任、三郎諏方の三人の息子がいた。父より三郎は惣領として東海道十五ヶ国、

太郎は東山道八ヶ国、次郎は北陸道七ヶ国の総追捕使職を与えられた。

三郎は妻の春日姫を伊吹山の狩り場で天狗にさらわれたが、日本六十余州の獄を捜しとめ信州蓼科の人穴から救出した。しかし、三郎自身は、次郎に綱を切られ地底の国々を遍歴し、維緩国にいたる。

国主好美翁の末娘維摩姫と結婚する。やがて、三郎が帰国することになると、維摩姫は、三郎と約束して、

御辺、日本送奉、我神国、跡追参、忍妻身成、衆生擁護神成
という。

日本までは一千日の道中であり、食料として鹿の生肝で造った餅千枚を国主よりもらう。また、帰途の道中にはさまざまな難所があるので、その通過する方法を国主から教わる。

契河 ここには白道という白いかけ橋があるが、上の瀬から毒蛇、下の瀬から蜈蚣がさかのぼって来るので、その時にはこれを帯にまいて通れと「菅行騰」を国主より授かる。

契原 ここには糟蛇がいて目・口・鼻から入ろうとするので、顔にあてよと「三段切中紙三帖」をもらう。この契河と契原の通過方法を、

今代祝殿御祭時、管行騰帶事此謂。御玉井紙三段切省
此謂
という。

亡帰原 この原には「蛇蛟」という虫が多くいる。その時はこれで打ち払えと萩の花を三把もらう。「今世初萩花云、道者省即是」という。

契陽山 この山の峠では、道を挟んで鬼王たちが邪魔をするので、その時には投鎌を取出し「汝等未知、維縵国主好美翁第三婿、甲賀三郎云者、名乗給」と、投鎌を三丁もらったことより、「今世御柱投鎌打、此故」という。

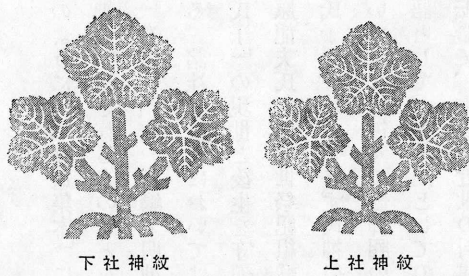
荒原庭 この原では美しい女房たちが七八十人道の両側に並び、三郎を留めようとする。その時にはこれを着て通れと「梶葉直垂」をもらう。

真藤山 この山の峠には美しい兒子たちが鞠遊びをしているが、彼らも引き留めようとするので幡を差し上げて「我は維縵国主、好美翁第三婿、甲賀三郎諏方」と名乗り通れと「三葉柏幡」をもらう。

難所の通過方法により、諏訪社における神事に関する由来、始まりが説明されているのであるが、諏訪社が村落に勧請された当初においては、本社の子事を説明することも、唱導者の大切な仕事であったのであろう。

なお「天正本」「寛永本」では、「天正本」に、

おほくのなんしよあるへし、しかりといへ共、申さんことくに、
すこしもたかへす、ふるま
いたまは、へつのことな
く、ほんてうへはつきたま
ふへしとて、みなみな
のな
んしよを、くわしくおしえ
たてまつり……。



(三輪磐根氏著『諏訪大社』、学生社刊)

とみえるだけで、難所の場所と通過する方法等がすべて省略されている。
三郎は、信州浅間嶽に出てくるのであるが、維縵国の衣装を

着ていたので、蛇姿であつた。御堂講の後、十数人の僧が昔物語をしてゐたが、三郎は「口立僧」が彼の物語をするのを盗み聞いて蛇服を脱ぐ方法を知り、御堂に素裸で入ると、僧たちが手厚く身のまわりの世話をしてくれるのであつた。

左右手、恥、隠、御堂内入給、爰老僧達、啖甲賀三郎、面々各々被三喜合、其中上座老僧、是用意候、白唐綾小袖梶葉直垂奉、左座一番老僧、是候、烏帽子・腰刀等取副奉、次老僧弓矢・太刀取副奉、右座老僧馬鞍等狩装束取副奉、此如老僧達昇消様失、これらの僧たちの素性を、三郎が「口立僧」に尋ねると、

御辺衣装奉、白山権現、次烏帽子等奉富士浅間大菩薩、次馬鞍等被、奉熊野権現、余僧達申、日吉山王・松尾・稻荷・梅田・広田等、王城鎮守諸大明神是（以下傍点筆者）

とその身元を明かし、王城鎮守の諸大明神が僧となり化現されていたのだという。

「口立僧」は、自らについては、

我是近江国鎮守兵主大明神申、殿原為氏神と語る。

そして、兵主大明神が三郎の安否が気がかりで、氏子たちとは別れ、影形のごとく三郎を守護したことを明かして

兵主大明神、氏子達別、余无心本無、（如影形付副立廻守護也）今暇申人々、近江国本社返給、

という。三郎譚では、衆生擁護の神道とは鎮守神（氏神）が氏子を守護することなのだと言明されていたことが確認できる。

2

このように、「神道集本」においては、鎮守神が「氏神」であり、鎮守神に守護される人のことを「氏子」としてゐるのであるが、『神道集』巻第一「九 鹿嶋大明神事」における氏神と氏子の関係と同じである。諸社の縁起においては、衆生擁護の神道とは、鎮守神（氏神）が「氏子」の現世と後生を守護することだとされてゐたのである。

萩原龍夫氏は『中世祭祀組織の研究』において、

氏子は、（１）まず氏神の眷養を受ける者として現われたが、ついで（２）神々の信仰圏の拡大にともなう新加の信徒をあらわす語として、祭祀団としての「氏人」と混用されるに至り、さらに転じて、（３）近世の封建制下の郷村にふさわしい、地域的祭祀団として、今日の理解に近いものになつてくる。

と「氏子」の意味の変遷を論じられた。

（１）の氏神の眷養を受ける者という意味で使用されている例として、萩原氏は『神道集』の「鹿嶋大明神事」と同巻第六「三十三 嶋之大明神之事」、日蓮の「内房女房御返事」と『諫曉八幡抄』をあけておられるが、「諏訪縁起事」には言及されておられない。

萩原氏は「東洋文庫本神道集」を引用されたのであるが、本稿で引用している「赤木文庫本」にはつぎのようにみえる。

「鹿嶋大明神事」

采女所、忠為詩云、神明国守時人種繁昌、天下進、信心心在時諸神明言永代弘、此詩中神明国守者、今鹿嶋大明神氏子堅守事明。

「三嶋之大明神之事」

三嶋大明神御託宣、我氏子ヒワ木愚スヘカラス、我子ヒワ枝置シ故也。ワシハ鳥王、ワシ取、我子、万民王成、争愚シ、神明法授、ワシ大明神号、イヨノ国、一宮御前御社は也

ところで、「東洋文庫本」では傍線箇所（以下傍線筆者）を「我氏人」と書き、人に「コ」と傍訓する。萩原氏は「彰考館本」に「我氏子ハヒワ木愚スヘカラス」とあることにより、「極めて微妙なところなので、さらに諸本について確めねばならいけれども、敢て推察を下すならば、氏子という語に耳で慣れはじめ、口承文芸の本のことで、大体は口言葉に従うものの、氏子が文字の上では未だ熟していないために、漢字を宛るに際して氏人と書いてしまったのではなからうか。

そしてこの場合、三嶋明神の氏子というより、かの八幡大菩薩の託宣の中の石清水の氏人というのに近いのであるから、氏人であっても差し支えないのである」と述べられた。「天理図書館本」には「三嶋大明神御氏人ビワノ木ヲ愚カニスヘカラス」と。「河野本」には「三嶋ノ大明神御託宣ニハ我氏人ハ枇杷ノ木ヲ不可愚」とある。「彰考館本」は「赤木文庫本」系統の一本を小山田与清が書写したものであるので、「氏子」と書くのは「赤木文庫本」のみということになる。したがって、良順が「氏人」を「氏子」と書き改めたと推測でき、もととは「氏人」と書かれていたと思われる。萩原氏の卓識であろう。「諏訪縁起事」「鹿嶋大明神事」においては、『神道集』諸本において、管見の限りすべて「氏子」と書かれている。ことに「鹿嶋大明神事」には、

今昔此御神氏人、大中臣鎌足村子云人、天津児屋根尊金鷲乘、天

神社と悪人往生

下給時、銀鶴乗御友候、其御末也（中略）今、関白家、即此御末也、鹿嶋大明神、忝御氏神、新立

とあるので、「氏人」と「氏子」が区別されて使用されていることがわかる。

日蓮の著述では前掲二書のほか、「曾谷殿御返事」に、

仏法うせしかば王法すでにつき畢。あまつさへ禪宗と申大邪法、念仏宗と申小邪法、真言と申大悪法、此悪宗はな（鼻）をならべて一国さかんなり。天照大神はたましいをうしなつて、うちこ（氏子）をまほらず、八幡大菩薩は威力よはくして国を守護せずとみえる。

このほか、『一宗行儀抄』には、

大日本国トシテ三千余座ノ神、六十余州ニ地ヲシメ在ス。其外勸請ノ大小神祇、十萬億ノ莊頭是アリ。其ニ必本地ノ仏闍ノ在シテ、仏法神祇ノ二法車輪ノ如シ。其内ノ村里ニ生ヲ受、氏子トナツテ垂跡ヲ兎角ゾト申サン

と。文保本系統の太子十歳の段にも、

実ニ吾朝ハ、雖粟散ノ少国、神明造出シ給ケル国ナレハ、名ニ神国、貴賤上下諸人ハ、亦神明ノ生育給ヘル故ニ、為神氏子、其力用勝他国夷、然則我生レテ僅十歳也、自一人力用、数千万大勢難レ叶ニ夷共ニカ、争カ日本国ノ多ノ随ニ神冥ノ氏子、争カ可成ニ此国主哉

と記されている。

萩原氏は「氏子」が神に眷養される者という意味をもって出現した

とされたが、以上、『神道集』、日蓮の著述、『二宗行儀抄』、文保本太子伝におけるは引用例からも明らかのように、氏子を眷養する神とは仏菩薩の垂迹とされる神である。すなわち権社神に守護される人たちのことを呼ぶのに「氏子」が使用されているのであり、けっして古来より村落に在来する実社神と民衆とのあいだに「氏神と氏子」の関係が成立しているのではない。諸国に鎮守の神として勧請された垂迹神に守護される人たちのことを呼ぶ場合に「氏子」が使用されている、ということが出来る。在地の神と人びととの間に「氏神と氏子」の関係が成立するには、衆生擁護の神観念が必要であることから、本地仏を設定する必要があったと考えられる。

3

三郎と妻の春日姫は「神道の法」を受け、衆生擁護の大明神となり諏訪社の上宮・下宮と現われた。また維摩姫は浅間大明神、次郎は北陸道の守護神となり若狭国田中大明神、太郎は下野国宇都宮示現太郎大明神、父は赤山大明神、母は日光権現となって現じたというが、これらの神々は、

皆御本地弥陀・薬師・普賢・千手・地藏等、此御中甲賀三郎諏方上宮、顯給、本地普賢菩薩、春日姫下宮、顯給、本地千手観音

とあるだけで、個々の大明神の本地仏や三郎と本地普賢菩薩、春日姫と千手観音との関係についての説明がなくよくわからない。とにかく「仏菩薩、応迹我国遊、必身苦悩受、衆生歎思知、処」なのだとする。

巻第六「三十四 上野国児持山之事」にも、

仏菩薩、応迹示現神道、必縁起事、諸仏菩薩我国遊、必人胎借、

衆生身成、身苦悩受善惡試後、神明身成惡世衆生利益給御事也という。

仏菩薩はわが国に人と生まれ、その一生において、人がその生涯において経験する悲しみ苦しみを自ら体験するのであり、その体験により人びとを守護するにふさわしい神となることができるのであるが、「天正本」「寛永本」にも、

そも／＼ふつほうさつ、我かくににすみたまふ事は、くるしみのしゆしやうを、たすけみちひかんためなり、またわれも、くるしみにあひつゝ、しんめいの身をかり、しゆしやうをたすけ、わくわうすひしやくの、りやくなれば、うらみもみとりこのことし

〔天正本〕

と述べている。

浄土往生について、「天正本」では、

かうかの三郎よりかたは、一さいしゆしやうを、我かちやうとへ、みちひかんと、ちかひたまふ

と述べて、三郎の使命とは苦しみの衆生を浄土へ引導することだとしている。「寛永本」「弘化本」では、維摩姫も我が浄土へ衆生を導かんと誓って浅間大菩薩と示現したのだという。

ゆいまんこくのきさきも、かうか殿の御なこりをわすれたまはずして、あとを思ひ給ひつゝ、しなのゝあさまのたけに出たまひておなしくとくをあらはし、ちきりをむすひて、あさまの大ほさつとかうして、一さいしゆしやうを、わかしやうどへみちびかんと、ちかい給ふなり〔寛永本〕

「弘化本」では、七年に一度の御柱祭りに参るひとは、子孫繁盛・現世安穩・後生善処が疑いないとして、参詣を勧めている。

七年に一渡^(度)、おんはしらとて、まつり有り。これ参るともからは、らず子孫繁昌に、現世安穩、後生善所、うたかへなし

「神道集本」の縁起の末で、

凡日本六十余州神祇神社多^ト云^ヘ、心深^シ神明^{ミコタマ}身受^{ミタマウケ}、応迹示現^{オウシキ}徳新^{トクニ}、衆生守護^{しゆじゆしゆ}方便^{へんぽん}忝事^{けんじ}、諏方^{すかた}大明神^{だいめいじん}御方便過^{みへんぽんくわ}无^ム

というのは、諏訪社の分祀が勧請された村落においては、氏神兵主大明神が氏子の三郎を守護したように、現世・後生においてかたく守護するのだということである。

諏訪社を鎮守として仰ぐ人びとが、三郎の物語を繰り返し聴聞することで、諏訪社への信心をあらたにしたことであろう。

なお、兼家系ではあら人神となつた三郎と姫宮大明神は、二人して天竺に赴くが、天竺では垂迹を崇めることがないので、日本に帰ってきたという。

てんちくの人あかめ参らす事おろかなりければ、あら人神おほせられけるは、此国はひろしといへとも、人の心かいぬにて、すいしやくをあかめ奉らぬなり。我朝日本国は小国なれとも、人こゝろかしこくて、すいしやくをあかめまいらするなり、おなしくは我朝をまもらむとて、又日本国へかへらせ給ふ(「天文本」)。

そして、諏訪の上社・下社として鎮座したことを、つぎのようにいう。あら人神は、かみのむらやまやまもとやすのきのもとにかく給て、御繁昌有、かたしけなく御本地普賢菩薩、諏訪大明神是也。

神社と悪人往生

ひめの宮の大明神は、下のみさやまもとやすの木のものといたゞせ給ふて、御繁昌有、本地千手観音、下のみさ山是也(略)あら人神はかみの御佐山にて、御年七十三にて、御往生とけ給て、大明神とあらはれて、一切の衆生の願をみてさせ給ふなり(「天文本」)。

三 諏訪信仰と『法華経』

「神道集本」において、御堂講に集まつた僧たちが読誦していたのは『法華経』であつた。「神道集本」では『法華経』が強調されているとはいえないが、そのほかの諸本においては、『法華経』の功德が強調されている。

「神道集本」では、次郎が春日姫を妻としようとしたときに拒んだので、殺そうとしたときに、姫は「且暇許、御膚守千手経取出読」んでいる。諏方系「天正本」「寛永本」「弘化本」では、『法華経』を読誦することで夫三郎とともに浄土往生をとげることを願っている。

「寛永本」「弘化本」ではこの窮地を脱することができたのは、法華三十番神の加護によるとしている。

もののふにいとまをこひて、ほけきやうの六のまきを、はんくわんはかりとくしゆして、おつるなみたをおさへて、のたまひけるは、ほけきやうは一け一くも、とくしゆ申におよはす。そのうへ五十てん／＼と、申つたへうけたまはり候。みつからつるきにかゝるといふことも、こせうはうたかひなしとて、にしにむかひて、かうかの三郎殿、人穴に入候ともろともに、いちふつしやうとへむかへ給へとて、いのり給へは、たちとり、うしろへまはり

けるところに、かのほけきやうぢうらせつによ、三十ばん神の御たすけにやありけん……〔寛永本〕。

「神道集本」では釈迦堂は三郎が父のため建立したとされたが、諏方系「天正本」以下の諸本では三郎の父が建てたとする。「神道集本」同様に参集した僧侶が読誦するのは「そうたちあまた、御たうへまいり、ほけきやうをとくしゆしたまひけり〔天正本〕」とみえるように『法華經』である。

春日の社に籠っている春日姫を迎えに三郎が行くと、姫は『法華經』を読誦していた〔天正本〕「弘化本」。「神道集本」「寛永本」には經典読誦の記述はない。

かすかのやしろへまいりたまへは、きたのかたは、ねんしゆして、なみたをなかし、ほけきやうとくしゆして、おわすところへゆきて……〔天正本〕。

姫は、なみたをうかべ、法花經を、どくしゆしてをはします所に、頼方こそ只今参りて候と……〔弘化本〕。

兼家系においてみると、魔王に捕らえられた一条大納言の嫡女は穴の底で『法華經』を読んでいた。

年の程十二三ばかりとおほしきひめきみの御こゑにて、法花經をよみ給ふ、三郎殿あやしみ給ひて、内に入て見給へは、ひめきみ十二ひとへをめして、水精の珠誦を手になきて經をよみ給ふ〔天文本〕。

年十二三斗カト覺ル姫君（三条大納言の嫡女）ノ御声ニテ、法花經ヲヨミ給フ。三郎殿アヤシメテ、内へ入テ御覽シケレハ、姫君

十二一衣メシテ、スイシヤウノ念珠御手ニヌキ入テ、經ヲヨミ給フ〔望月本〕。

とみえる。しかし、「赤木文庫本」「吉田本」では、

十二三ばかりのひめきみ（一ちやう大なこんのちやくによ）、十二ひとへきて、すいしやうのねんしゆを御手にぬきいれて、御きやうをよみ給ふ〔赤木文庫本〕

十二ひとへきたまひて、ひめきみ（一ちやうの大なこんのちやく子）のいつくしきがすいしやうのじゆすをてにぬきて、御きやうをよみ給ふ〔吉田本〕

となつて、『法華經』を読んでいたとする箇所を省略している。

「正保本」には、

十七八とみへさせ給ふ女ぼうの、まことに、あたりもかゞやくけしきにておはしけるが、こがねのつくへに、こんでいのほけきやうのひぼをとぎ、しのびによみてまし／＼けるが、これはいかさまりう女かと、目をおどろかしたまひける

とみえるほか、女性と法華經信仰を説いている箇所もあり、若狭国七日山の中で出会った女性たちをつぎのように記している。

十七八、廿ばかりの女ぼうとみへて、十二人つれて色々のしやうぞく、十二ひとへかざり、くれなひのみへばかまふみしだき、かうのうらないしのなかをふみ、みなすいしやうのじゆずをもち、左のたもとにこんでいのほけきやうを持ち、右の袂には古今・万葉・伊勢物語・いわやの二くわんといふ、かずのさうしをたもとにもちて、所々をよみ、さじきのちかなりしかば、ほけきやう

をひらき、一えんにどつきやうして、今度こそ、女人の生をうくる共、かのきやうのくりきによつて、女しんをてんじ、ぼだいのしやうぜんにむかへさせ給へとねんじゆして、こゝろしずかにあゆみける

また、『法華経』と諏訪社との關係を、

三郎殿はしなのゝ国へくだり給いて、すわのこほりにあとをたれ、三郎殿は上の明神とあらはれ給ふ。ふげんぼさつにてまし／＼けり。六ひきのびやくぞうにのり、ほつけざんまいのだうぢやうにわたりたまふ。さればすわしんかうの人は、いかにも、ほけきやうをよみたてまつりたまふべきなり

と説明している。

このような「諏訪縁起」における『法華経』の功德の強調は、諏訪本社における神仏關係が反映したものである。

円忠の「諏訪大明神絵詞」によると、上社には本地普賢菩薩が安置され、法華経書写が年中行事となっており、法華三十番神が勧請されている。「天正絵図」には、上社本宮拜殿正面奥に鉄塔が描かれているが、これは法華経を納める石の多宝塔である。江戸時代には、上之坊ともよばれた如法院が毎年『法華経』を書写し納めていた。鷲尾順敬氏の「信濃諏訪神社神仏分離事件調査報告」には、「諏訪上社記」に「納経法華経書写、如法院三月廿一日ヨリ、七日精進而書始ム、紙者美濃紙ヲ洗、筆者榎木枝ニテ作り、一字三礼、法華堂ニテ書写ス、十月十三日ヨリ禁足、十六日辰ノ刻ニ鉄塔へ納之、其時之社僧八人也、但シ、昔者十月七日ヨリ禁足有之トゾ」とみえることを引用した、こ

の行事の詳しい説明がある。⁽²³⁾

本地を普賢菩薩とする文献上の初出は、宝治三年（一二四九）の大祝諏訪信重解状（「大祝家文書」）に「本地者普賢薩埵也」とあることだといわれる。⁽²⁴⁾ 普賢堂の建立は、棟札写によると正応五年（一二九二）諏訪一族の知久行性による。行性は下伊那の神ノ峰城主であり、五重塔棟札写・鐘銘にも彼の名がみえている。⁽²⁵⁾ 上社神宮寺である法華寺は諏訪盛重の創建と伝えられているが、本尊釈迦仏は胎内銘によると永仁二年（一二九四）の造仏である。⁽²⁶⁾

八月八日造

勅願奉納如法経一部、大仏師周防法橋釈迦三尊造立之、永仁二年

十月日 郡中大勸進観海

奉納仏舍利十粒、十月十八日供養

諏訪本社における造寺・造仏の年時よりしても、甲賀三郎の物語の成立は鎌倉時代の後半になってからのことではないだろうか。

四 「諏訪縁起」と親への孝養

「神道集本」では、三郎の父母への孝養、追善供養、春日姫の夫三郎への孝養を強調しており、諏訪社上宮と現じたことをして、

上宮御誓、我身久他国流浪、父母恩報シ事、不孝罪浅猿、親後々服、深禁給

と記している。

親への孝養、追善供養の大切なことを説くのは両系統諸本に共通することである。

諏方系の「天正本」には、

また我がひさしく、おやのおんをおくりたまはんゆへに、みつからかまへゝまいるしゆしやうは、いかにもおやのけふやう、ねんころにあらせんかために、かけの月までいませたまふなり

「寛永本」には、

またひさしくるらうして、おやのおんをおくりたまはず、月に一どの、そのめいにちにあたるときも、きようをよみ、念仏を申といへとも、僧をしやうし、供養し奉ることもなかりしに、なおそのをんふかし、されはみつからかまへに、まいらんしゆじようは、いかにも／＼おやのきしやう、ねんころにあれとて、かけ月をそへていみたまふなり

「弘化本」には、

久々、げかいを流らうして、二親のとふらいをも、無沙汰し、ふこののつみを、くわんして、わる屋代参るべきと、おもふともかは、まつわか親に、こう／＼すべし。親にこうへなる者は、我が前へまへらすとも、まへるべしとの、御くはんなり。

さるほとに、世の中の人々、おやに孝行のものには、かをにかけの、そふがごとく、御めくみあると心得べし。夫に仍て、かけ月をそへて、いみ給ふ也。あながちに、きらへたまふにあらず。たと親の後世を、念頃に弔との、おしいなりとみえる。

兼家系諸本においては、上述のような記述はみえない。諏方系では三郎には子供がなかったが、兼家系では一子小太郎がいる。小太郎の

父三郎への孝養を説くとともに、念仏往生、念仏による追善回向を勧めている。

「天文本」よりその例をあげると、

(小太郎) 南無阿弥陀仏と申て、父のための廻向し給ふ(略)いかなる野の中山のすえにも、持へき物は子なりけり。かね家一人の子をもたすは、誰か只今父のためと念仏申てえかうすへき

(三郎) 此穴に身をなけはやおもひて、西にむかひて高声に念仏となへ給ひて、生年二十五と申せししに給ひける

(物語僧) 定命六十年とは申せしかとも、生れて三つ四つにて死するも有(中略)定なき生老病死のならひなれ共、経をよみ念仏を申誦候へは、かならず往生するなりとこそよまれたり

また、伊賀物である「正保本」以外の兼家系諸本においては観音信仰を勧めている。三郎が蛇服を脱ぎ人間の身にもどることができたのは、小太郎が父三郎の三十三年忌の供養のために建立した観音堂の本尊の利生によるとしている。そして、この観音は父への深い孝養のため造立されたものであるから、衆生の願いを満たすことができるのである。

甲賀三郎殿ノ嫡子小太郎殿トテ御座スカ、父三十三年孝養ノタメニ作給タル観音堂ヨ。此観音ハ、靈驗アラタカニシテ、衆生ノ願ヲ叶玉ハスト云事ナシ。観音ノ利生何レナントモ、此ノ御堂ヘハ、六月十七日、十二月十七日ニ必ス参詣申スヘシ。福德利生ヲ蒙リ、現世安穩後生往生スヘキ也(「望月本」)。

いかなる野のすゑ山のおくにも、もつへき物は子也けり。かね家

一人の子をもたすは、誰かがゝる供養はすへき。かねいゑのためにつくりたる御仏の、人の申ねかひをかなえさせ給ふ覧、まつたつとさよ。それにつけても参り、へひのすかたをいのり申さんとて、つかのもとをは出て給ひて、御しようめんにてきねんこそぶかゝりけれ。大悲大慈の観世音、ねかわくは本様の悲願、へんひのたひを引かへて、かね家の本鉢の凡夫のかたちになし給へと、三十三度のをかみを申て、三十三巻の観音経をよみ給ひて廻向し、たてまつる。なく／＼祈請申されけり（「天文本」）。

「赤本文庫本」「吉田本」においては、『法華経』の功德を説くことがないので、観音の靈驗が強調されている。「正保本」の成立が兼家系諸本のなかで、もっとも遅れて成立したと推定できるので、兼家系の「諏訪縁起」における仏教信仰とは観音信仰を中心とするものであったといふことができる。

「吉田本」が、あら人ハカミの御しやさん、もとやすのこほり、これもとにつかせ給ひて御はんしやうありけり。かたしけなくもほんちふげんぼさつこれ也

すはの大ミやうしんハ、しもの御しやさんもとやすのこほりにたゝせ給ひて御はんじやうあり。ほんちせいしくわんをん、しもの宮これなり

と述べて、下社を諏訪大明神と呼んでいることを、誤写とか勘違いとして見逃すわけにはいかない。金井氏が指摘されるように、兼家系が下社の信仰圏で成立したということかもしれない。

なお「正保本」系統の成立について説明することはできないが、三郎が蛇服を脱ぐことができたのを、妻と子どもが三十三回忌の追善供養を盛大にもよおしたことによるとし、錫杖の功力によるとしている。

八まん四千きやう、さま／＼なりといへども、さいほうごくらく（西 方 極 楽）のうてな（合）にいたるは、みだのめうがう也。一念みだぶつ、そくめ（無 量 壽）つむりやうざい、げんしゆむびらく、ごしやうしやうぐどとのぶれば、むりやうのつみもたちまちにきへ、今生にては、ゆやく（歡 喜）くはんきのたのしみをうけ、りんぢうの時（影 向 來 臨）はむじゆのぼさつをしやうじ、やうげんらいりんし給ひて、九ぼんのぢやうどせん（品 徳）にいでうし給ふ事うたがいなし。しゆぎやうさま／＼なりとは申せ共、たちまちにじやどう（諸 道）の身をのがるゝは、しやくじやう（編 纂）のくりきとこそうけ給り候へば、さだめて、じやどう（結 願）のくるしみまし／＼たまふらん。三十三年の御仏事、こん日（結 願）けちぐはんにて候へば、おなじくはしやくじやうをあそばし候ふて、御とむらい候はゞ、しかるべく候（「正保本」）

五 「諏訪縁起」と殺生祭神

1

「天文本」は絵巻であるが、第十四図から第十九図にはつぎのような絵が描かれているという。

絵第十四図（三郎、栗畠のやぐらにて鹿を追う翁に出会う）
絵第十五図（三郎、やぐらに上り、栗畠に現はれた鹿を射る）
絵第十六図（翁の教へにより、三郎射殺した鹿をならす）

繪第十七図(三郎、翁の教へに従い、鹿の焼皮を負ひ、日本へ向けて出立す)

繪第十八図(七日目に清水あり、三郎翁の教へに従ひ、鹿の焼皮を食し水を飲む)

繪第十九図(四百八十六枚の焼皮食べ終へると、三郎まもなく穴の出口にでる)

諏訪社の殺生祭神についての説明は「神道集本」以下三郎譚諸本にみられるが、山野のけだものと仏法との結縁のためだと説明されている。

諏方系よりみてみよう。

「神道集本」では、

明神維縵国御狩時例、狩庭宗トシ給

という。嘉禎三年(一二三七)五月、長楽寺寛提僧上が供物に不審をなし、「権者実者垂迹、俱仏菩薩化身、衆生濟度方取給、而何強何必獸、多致給」と大明神に祈請すると、寛提の夢に、「御前懸置タリケル鹿・鳥・魚等、皆金仏成雲上登り、大明神は、

野辺スモ ケタモノハレニエンヤクハ ウカリニヤミニナヲマヨハマシ

といい、雲上に昇っていく仏達を指さして、

業尽有情、雖放不生、故宿人天、同証仏果

と言ったとして、業の尽きた有情は放しても助からない。ゆえに、人天の胎に宿して、終に仏果を証するのであるとして、諏訪社における殺生祭神を説明している。

「天正本」では、「こうや」上人が諏訪社に参籠して、御本地は大菩薩であるのに山野の獣を殺し贅とすることの不審を大明神に尋ねると、五日目の曉に「御てんの四はうに、二三すんのほとけ、みち／＼たまひ」、暫くして、「かちのはのひたゝれに、けんしやく」を持った大明神が現じて、

なんちおろかなり、うるのけた物、むようのあくにん、しゆしやうのしきとなり、いたつらにしゝ、いたつらにしやうして、るてんするをあはれまんかために、しはらくみつからに、ゑんをむすひ、らいせをたすけんかためなり。

(業尽有情) こうちんうしやう (雖放不生) すひこふしやう (故宿人天) こしゆくにん中 (同証仏果) やうふつくわ

こうのふかき、うしやうは、はなつといへともいきす、かるかゆへに、身のうちにやとして、ふつくわをせうせん。このもんをこころへへし

との託宣があつたという。「寛永本」も同様である。

「弘化本」では、僧の諏訪社参籠については省略されているが、御謝山祭に鹿二頭を殺し、その頭を大明神の宝前に供えることを述べている。

殊更、頼方大明神、菩薩にてましますか、山野のけたものをこらし、御前かけゝると、ふしんありければ、

大明神、しやくたんの扉を押排、かちの葉の、ひたたれをめし、御手には、けん作といふ、つるきを持たまへて、御たくせんにいわく

われ、むかし、辨井万国にて、鹿狩をして辨ひし事も、しひをもつての儀なり。かるが故に、神とあらはれても、殺生おもしろき翁になり、其語に曰く。

業尽有生 雖放不生 故宿人身 同証仏果

惣して、殺生を好み、生物を殺たらん輩は、此文をとなへ、是を



上社十間廊で行われる御頭祭（『諏訪大社』、信濃毎日新聞社刊）

頼方の、四句の文と云也。

文の心に、業のつきたる、いきものは、はなすと故とも生ず、かるがよいに、人の身と成り、同く仏果に、せうせむと、御神たくありて、神はあからせ給ふしなり。ありかたきの事計はなかりけり。

かるかよいに、七月廿六日に、御謝山とて、祭あり。毎年其日、鹿式つ宛、いてころさるゝ也。かしらを、御前にかけゝるゝ也。また、狩猟のさいに、矢が命中し、忽ちに死んだならこの四句の文を唱えたら、諏訪大明神が仏生にかえしてくれるとも記している。

周知のように、この託宣は、「諏訪の勸文」と称され、鹿食（魚鳥）を食する許可証（鹿食免）として流布した。各地の鹿食免については、福田晃²⁸氏や千葉徳爾氏の詳しい報告がある。千葉氏は、鹿食免の形式



「鹿食免」「鹿食箸」の板木（『諏訪大社』、信濃毎日新聞社刊）

に免許状形式のものと箸守り形式のものとがあり、前者は神社の権威を背景として神職が出し、後者は血統なり伝承なりによって諏訪の神人と世間から認められた家系の人が出していたことを、多くの事例をあげて指摘されている。⁽²⁹⁾

兼家系をみてみる。

兼家系の諸本には、このような託宣の話はない。「正保本」に四句の文が引用されているが、或経文に云くとしてである。⁽³⁰⁾ 諸本では大明神と鎌との関係が詳しく説明される。

「天文本」には、

大明神の御前に有二のかまは、禰の国にてしゝのかは二つならし給て、うへをやすめ給ひたりしかまのゆへなり

といひ、

大明神の御前にせんつのいき物の参る事は、禰の国にていませ給ひたりしゝのおんしやうを、とふらはせ給はんために、御ちかひによりてはしまりて、よろつの生類をにゑにかけさせて、縁をむすひてすくはせ給ふなり

という。

「望月本」には、

大明神ノ御前ニ、鎌ヲ立ル事ハ子ノ国ニテ、鹿ノ皮ヲナラシ玉フ時鎌ナリ。千頭ノ生物ヲ参セル事、根ノ国ニテ射玉ヘシ、鹿ノ後生ヲ訪セ玉シタメナリ。

と。「赤木文庫本」にも、

いまのよにも、すわ大みやうしんのまへに、かまといふものをた

つることは、ねのくにゝて、しかのかわをきり給ふゆへなり、千つのいきものまいらする事は、ねの国にていさせ給ふしかの、御とむらいのためなり⁽³¹⁾とみえる。

両系統諸本とも、維縵国で諏訪大明神となる三郎が鹿狩りをしたことが、諏訪社における殺生祭神の由来であると説くのである。また、先に紹介したように、諏方系では帰国の道中には多くの難所があるとされ、ことに「神道集本」では諏訪本社⁽³²⁾の神事由来の紹介を兼ねて語られたのであるが、兼家系には難所はない。

そのかわり諸本において、鹿の焼皮の食べ方が詳しく紹介されている。「天文本」には、

あのしゝをやるかわにし給へとてやる皮にし、たて横一寸に切おきてかそへ給へとてかそふれば、四百八十六枚にそかそへたり、になひたはらにせよとて、たはらにてせをわせ奉りぬ。我朝にてはいつならひ給ふへきに、いとをしき有様なり。されとも日本の恋しさに、くみなわもつらからず

といひ、翁が、四百八十六枚の焼き皮の食べ方を教えたことをつぎのように述べている。

あひかまゐて行給はんするに、七日行て其を一切食て、水三すくひまいりくして行給へ。此四百八十六枚のやるかはみなになりたらん時、日本へつき給はんするなりとの給ひければ、三郎殿よろこひ承ぬ。七日くのさかひ候はんするなり。かならず清水の候はんするなり、七日より中には水候はぬぞ。いつみをするへに

て行給へ。かまえて／＼此の国の物はし、草葉にても候へ食し給ふな、さあらんにつゐては、日本へはつき給ふへからず、くるしくてやすみ候はんには、行さきを枕になして、足跡をは先々になし給へ、かまゑて跡を見給な。

2

狩獵をし、その肉を食する人の往生を説く三郎譚の成立を考える上で注目しておきたいのが旧稿でも指摘した『広疑瑞決集』⁽³²⁾である。法然の孫弟信瑞が、建長八年（一二五六）、諏訪一族の上原馬允敦広の二十五ヶ条の質問に答えたものという。上述の盛重は信瑞に帰依したといわれる。『法然上人行状絵図』⁽³³⁾巻二十六は、北条時頼は信瑞が贈呈した法然伝を披覽して増信し、念仏往生をとげたことを、盛重が手紙で信瑞に知らせたことを伝えている。

諏方の入道蓮仏、敬西房に送遣状云、西明寺殿御往生の事、中々不及申目出き次第にて候、十一月廿二日亥時に、唐ころもめしてけさかけて西方にあゝたほとけをかけまいらせて、いすにのほらせ給て、御いきすこしもみたれす合掌して御往生候也……あみたほとけの御ちからにて、浄土へまいりたらハ、むかへうするそと仰の候しかハ、日ころ不足なくかうふりて候し御恩にハ、百倍千倍してたのもしくありかたく覚候て、歎のなかにもうれしく候

(下略)

なお『吾妻鏡』弘長三年（一二六三）十一月二十二日条には、時頼の臨終を「於最明寺北亭卒去、御臨終之儀、着衣袈裟、上纏床、令座禪給、聊無動搖之氣」⁽³⁴⁾「終焉之剋、叉手結印、口唱頌而

現即身成仏瑞想、本自權化再来也」と記している⁽³⁴⁾。

『広疑瑞決集』では殺生祭神を否定し、清浄祭祀を勧めるのに、生を殺し祭るところの神明は本地を現わしているが、その本地とは仏菩薩である。神は利生のために光を和らげ、凡夫に同じているのであるから、実には食さないのであり、祭りのために殺された魚鳥は、神官たちの宴会となるだけだという。仏菩薩が殺生を憎むことを、『涅槃經』に「菩薩、為度衆生、示現食肉、其実不食」とみえるといひ、『本朝神仙伝』等に登場する円珍に三井寺を譲った教待和尚の肉食⁽³⁵⁾を、和尚が弥勒菩薩の化身であることより、魚鳥への結縁のためであつたとする。

すなわち、

慈氏菩薩の後身の教待和尚、あに殺生肉食の義あらんや。本地をきゝて今のふるまひを思ふに、只是等覺の菩薩、觀機三昧の眼をもちて、湖中浮沈の果報転じがたき魚鼈の或は自死、或は只今命つきたるをみつめ玉ひて、^{如金翅鳥食死相現諸竜}自是を取りて食まねして、和光同塵のいさゝかの結縁を初として、八相成道のをはりに、皆悉く済度せんとなり。余の一同の和光神明の義、亦復如是

といひ、そして、

神明等、跡をたれ居をしめ玉ひし初、愚痴闇鈍にして、蓄生の報改めがたき鹿鳥等の或は自死、或は命尽たるを照見して、実には食することなしといへども、教待和尚のごとくに、縁をむすばしめんが為に、この神明等もしは示現し、もしは託宣して、自社壇にそなへたりけるなるべし。一定仏菩薩の權化たらん

といふ。⁽³⁶⁾

このような説明が神社において一般化したことは、永祿三年（一五六〇）の「春日大明神御託宣記」⁽³⁷⁾に「神供ニ魚鳥ヲ備進スル事、是強食セン分ニハアラズ。皆以テ、為濟度方便也。然ルヲ各不得其意者也」とみえることから明きらかであろう。

神社において祭神と仏菩薩との本迹關係が主張される以前の祭祀方法である生を殺し神を祭ることを伝存し、狩りを宗として御家人の信仰をあつめた諏訪社において、帰依者の現当二世にわたる擁護を約束するためには、諏訪大明神が「生身の仏」でありながら殺生祭神を要求する神であることが合理的に説明されねばならなかった。

千葉氏は、前述諏訪の四句の文を、殺生そのものを罪としないに止まらず、その動物の肉を食うことがけがれた行為ではなく、これを神に奉ることによって動物に功德をほどこすものであるとしている点が重要で、「諏訪信仰が死屍を取扱う穢多・非人の徒に奉ぜられず、生命ある野獸を狩る獵師と武士たちに厚く信じられた理由の主なもの、これだったと考えられるのです」⁽³⁸⁾。「時あつて狩をおこない、皮類を身につけても、けがれないとみなされるためには、まず肉食をしなから神拝を許される資格をもつ必要があるわけです。こうした矛盾した要求を調和するものとして生まれたのが、諏訪神社の鹿肉免で、すなわち、鹿肉をたべてもそれが神への供物となるという解釈に立つ、一種の免罪符であろうと思うのです」⁽³⁹⁾と説明される。また、「野獸の殺生とその肉を食うことが、神仏の意にそわない行為として忌まれるようになったのは、仏教伝来それ自体と直接関連するものとは思はれな

い。その間には約五百年の長い併存期間があつたのである」⁽⁴⁰⁾と指摘される。

神社において、山野の鳥獸を供えることが否定されるようになるのは、祭神が本地垂迹説の滲透により「生身の仏」とみなされたためである。すなわち、神にこの世のことを、その本地仏に來世のことを頼むという鎮守神信仰が村落社会に定着したことによると考えられる。⁽⁴¹⁾

仏法に見捨てられた人びとの往生を説く専修念仏の唱導を、諏訪社に鎮守神としての靈驗があることを説くにあたり参考としたと推測できるのであり、わたしは、三郎譚の成立と展開を、殺生を職業とする人びとを対象とした衆生擁護の神道（鎮守神信仰）の成立と展開として評価したい。

注

(1) 諏訪大社宮司三輪碧根氏著『諏訪大社』（学生社、昭和五十三年）に、全国の御分社五〇八九社を都道府県別にあげている。五〇社以上ある都県を紹介しておく。

新潟県一五三五社、長野県一一二二社、埼玉県三一八社、群馬県二四五社、富山県二二二社、福島県一四六社、千葉県一四五社、鹿児島県一一八社、岐阜県一〇七社、静岡県九八社、神奈川県八九社、茨城県七四社、愛知県六八社、栃木県五六社、熊本県五五社、東京都五〇社。「諏訪縁起」と関係深い滋賀県は一〇社、三重県は二七社である。

(2) 拙稿「中世の神祇思想と専修念仏―『神本地之事』『諸神本懷集』の成立を中心にして―」（『仏教史学研究』第二二巻二号、昭和五十三年）、同「甲賀三郎譚の成立背景について」（『印度学仏教学研究』第三二巻一号、昭和五十八年）、同「諏訪縁起」（『国文学 解釈と鑑賞』第五二巻九号、昭和六十二年）。

(3) 筑土鈴寛「諏訪本地・甲賀三郎」（『国語と国文学』第六巻一号、昭

和四年、のち『筑土鈴寛著作集』第三巻、せりか書房、昭和五十一年、所収。

(4) 柳田国男「甲賀三郎の物語」(『文学』第八巻一〇号、昭和十五年、のち『定本柳田国男全集』第七巻、筑摩書房、昭和三十七年、所収)。

(5) 福田晃「神道集説話の成立」(三弥井書店、昭和五十九年) 第二編「諏訪縁起の成立」に諏訪縁起に関する諸論文が収録されている。本書については、村上学氏の書評が『伝承文学研究』三二号(昭和六十年)に掲載されているので参照されたい。

(6) 松本隆信「中世における本地物の研究(三)」(『斯道文庫論集』第一三輯、昭和五十一年)、『室町時代物語大成』第八巻(角川書店、昭和五十五年)収録の吉田幸一氏蔵「諏訪の本地」の解題(松本氏執筆)。

(7) 金井典美「諏訪御本地縁起の写本と系統」(『諏訪信仰史』、名著出版、昭和五十七年、所収)。このほか、「諏訪縁起」を取り扱ったものに桜井好朗「神々の変貌」(東京大学出版会、昭和五十一年)、伊藤喜良「南北朝動乱期の社会と思想」(講座日本歴史4 中世2、東京大学出版会、昭和六十年)、同「神社縁起の世界からみた東国」(『福島地方史の研究』、名著出版、昭和六十年)などがある。伊藤氏は殺生に対する認識の違いが東国と西国の神社縁起にみられるとし「諏訪縁起」を東国の神社縁起を代表するものとして論じ、東国の神社縁起には狩猟や殺生に対しての「罪業」観は微塵も感じられないとされる。この指摘にたいして、平雅行氏は『部落史料集第一巻古代中世篇』(部落問題研究所、昭和六十三年)第二章「四 殺生墮地獄観と動物供儀」の補注「諏方」(二〇〇頁)において、伊藤氏のいう「殺生仏果論」「殺生功德論」が、西国の神社に見えることを指摘したうえで、仏教的合理化と理解すべきだと述べている。筆者は近江国を舞台とする「諏訪縁起」を東国を代表する神社縁起とみることに素直に服しがたいし、本稿で考察するように「諏訪縁起」は殺生を「悪」とする仏教思想を前提に製作された、諏訪社における本地垂迹関係にもとづき現当二世の靈験を説く神社縁起であり、伊藤氏とは逆に罪業観が読み取れるし、それを克服するための信心が提示されたものだと考える。なお、近年の「悪人往生」の研究とし

ては、高木豊「因果応報思想の受容と展開」(仏教と日本人四『因果と輪廻』、春秋社、昭和六十一年)、平雅行「解説房貞慶と悪人正機説」(横田健一先生古稀記念会編『文化史論叢(上)』、創元社、昭和六十二年)が興味深い。

(8) 『神道集』の引用は、古本系の明応三年(一四九四)良順書写本の複製本である『赤木文庫本神道集』(角川書店、昭和四十三年)による。

(9) 柳田国男「甲賀三郎の物語」(注4)。

(10) 拙稿「中世の鎮守神信仰と北野天神」(水野恭一郎先生頌寿記念会編『日本宗教社会史論叢』、国書刊行会、昭和五十七年)参照。

(11) 「神道集本」のあらすじ。

安寧天皇五代の孫である近江国甲賀郡の地頭甲賀権守諏胤と大和添上郡の地頭春日権守の長女とのあいだには、太郎諏致・次郎諏任・三郎諏方の三人の息子があつた。諏胤は太郎に東山道八ヶ国、次郎に北陸道七ヶ国、三郎には惣領として東海道十五ヶ国の総追捕使職を分与した。父没後三郎は都にのぼり帝の見参をえて大和守となり、春日権守の孫娘を妻とした。国中の武士を召集した伊吹山での巻狩のとき、春日姫を何物かにさらわれ、兄弟は日本各地の山やまを捜し求め、信州蓼科の人穴から救出する。しかし、三郎は姫が人穴に忘れた「面影」という鏡をとり穴におけると、兄次郎が綱を切ったので地上に帰れなくなる。次郎は春日姫を妻にし世の中を治めようとするが、姫は拒み三笠山の神出の岩屋に閉じ籠もってしまう。一方、三郎は地底の国々を遍歴し、狩りを宗とする維縵国にいたり、国主好美翁に歓待される。末娘の維摩姫と結ばれるが、やがて帰国することになり、この国の秘所を拝し、一千日の旅の食料として鹿の生肝でつくった餅とさまざまな難所の通過方法を教わり、信州浅間嶽に出てくる。故郷の甲賀に帰るが維縵国の衣装をまもっていたので蛇姿であつた。三郎がかって父の追善のために建てた笹岡の釈迦堂の御堂講で、僧侶に身をかえた近江国の鎮守兵主大明神が三郎の物語をするのを仏壇の下で聞き、もとの姿にもとることができた。そして、三笠山に隠れていた春日姫と再会し、夫婦は天早船で平城国に渡り、早那起梨天子より神道の法を授かった。兵主大明神の要請により日本国に帰

ることになり、夫婦は信濃国岡屋の里に諏訪大明神として立ち、三郎は上宮、妻の春日姫は下宮と示現したという。(兼家系) 三郎の父を「天竺はらない国」の人とする。兄弟三人が魔物を求めて諸国の山やまを巡り、若狭国高懸山で魔王を退治し、人穴より一条大納言の娘(実は大和国姫宮大明神)を救出する。三郎には一子小太郎があり、蛇服を脱ぐのは小太郎が父三郎の供養のため建てた観音堂においてだとする。

- (12) 人穴を遍歴する話としては御伽草子「富士の人穴」が著名であるが、『吾妻鏡』によると、建仁三年(一一〇三)六月一日頼家の命で和田胤長が伊豆奥野の狩倉で伊藤崎の大洞を、六月三日富士の狩倉では、頼家より御劔を下賜された新田忠常が主従六人で人穴を探っている。忠常はその日帰参することができず、翌日帰参したが、穴の中で郎従四人が亡くなる。この人穴は古老によると浅間大菩薩の御在所だという。

- (13) 『吾妻鏡』治承四年(一一八〇)九月十日条に、上宮大祝篤光への諏訪大明神の託宣を「爰只今夢想、着梶葉文直垂、駕葦毛馬之勇士一騎、称源氏方人、指西揚鞭畢、是偏大明神之所示給也」と記している。

- (14) 貴志正造氏は、口ききの僧の意、間に立って取次ぐ僧の意か。とされ、「寛永本」に「夜のものかたりの僧」「ものかたりのらうそう」(大原明神)とあることより、解説者・伝承者の性格を思わせると述べておられる(貴志氏訳『神道集』二九一頁、平凡社東洋文庫、昭和四十二年)。

- (15) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究 増補版』、三二六頁(吉川弘文館、昭和五十年)。

- (16) 「此国は始は神代也。漸く代の末になる程に、人の意曲り、貪瞋痴強盛なれば、神の智浅く、威も力も少し。氏子共をも守護しがたかりしかば、漸く仏法と申大法を取り渡して、人の意も直に、神も威勢強かりし程に……」(『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻、一七八九頁)。

- (17) 「今日日本国を案ずるに代始て已に久く成ぬ。旧き守護の善神は定て福も尽き寿も減じ、威光勢力も衰ぬらん。仏法の味をなめてこそ威光勢力も増長すべきに仏法の味は皆たがひぬ、齢はたけぬ、争か国の災を払、氏子をも守護すべき。其上、謀法の国にて候を、氏神なればとて大科をいましめずして守護し候へば、仏前の起請を毀神也。しかれども氏子な

れば、愛子の失のやうにすてずして守護し給ぬる程に……」(同右、一八三四頁)。

- (18) 『神道集』諸本については、近藤喜博「神道集について」(『神道集東洋文庫本』、角川書店、昭和三十四年)、貴志正造「神道集解説」(注14)、『赤木文庫本神道集解説・索引』(角川書店、昭和四十三年)、日本古典文学大辞典「神道集」(村上學氏執筆、第三巻四九九頁、岩波書店、昭和五十九年)等参照。

- (19) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻、一六六二頁。

- (20) 『真宗史料集成』第五巻、三三頁。

- (21) 本稿では『聖宝輪藏』を引用した(『真宗史料集成』第四巻、四五三頁)。拙稿「中世の太子信仰と神祇―醍醐寺蔵『聖徳太子伝記』を中心として―」(『鷹陵史学』第八号、昭和五十七年)参照。

- (22) 『神道大系神社編 諏訪』(神道大系編集会、昭和五十七年)。

- (23) 鷲尾順敬「信濃諏訪神社神仏分離事件調査報告」(『明治維新神仏分離史料』第二巻、七四五頁、名著出版、昭和四十五年)。

- (24) 『鎌倉遺文』第十巻、七〇六一号。久保田収「中世の諏訪大社」(『神道史研究』第二三巻五・六合併号、昭和五十年)参照。久保田論文は諏訪本社神仏習合について詳しく、本稿執筆にあたって多くの示唆をうけた。

- (25) 『諏訪大社』第五章「諏訪社と仏教」(今井広亀氏執筆、信濃毎日新聞社、昭和五十五年)により、知久行性の名前のみえる普賢堂棟札・鐘銘・五重塔棟札を紹介しておく。「本願 左衛門尉行性入道 大工南都東大寺藤原肥前守並小工四十人 正応五年五月十二日」(普賢堂棟札)、「永仁五年丁酉九月二日 檀那知久左衛門入道行性」(鐘銘)、「延慶元年八月十二日 神峰城主知久大和守左衛門入道行性」(五重塔棟札)。

- (26) 『明治維新神仏分離史料』第二巻(七六〇頁)より引いておく。

- (27) それ殺生をする時、三つの心有、鳥類、其田類によらずわか矢にあたらず、のかるゝ事も有、是をは、いまだがうの、きたらず、めでたきものと、思べし、少も、おしむべからず

又、矢に中、手負行もあり、是をは、つみ有る、けだものいんくわの、

むくへ、あるやらん、ふひんなりと、くわんすへし
又たちまちにしたるをは、いそぎ、この四句の文を、となへべし、我、
仏生にかゝすべし

是を、三心仏性と云也（弘化本）

- (28) 福田晃「甲賀三郎の後胤―甲賀三郎譚採集ノート（上）（下）」（『国学院雑誌』第六三卷六号、七・八合併号、昭和三十七年、のち『神道集説話の成立』所収）。

- (29) 千葉徳爾「諏訪の鹿食免について」（『信濃』第一五卷八・九合併号、昭和三十八年）。このほか同氏の「民間狩猟の作法にみられる諏訪信仰」（『信濃』第一四卷九号、昭和三十七年）、『狩獵伝承研究』第七章「狩獵信仰としての諏訪神道」（風間書房、昭和四十四年）、同「狩獵伝承」第二章「狩の儀式」（法政大学出版局、昭和五十年）参照。

- (30) すわの御にくがりに、ぢやうがうかぎりのし・鳥の、いたずらにさんやにて、しにうせぬるをからせて、明神の庭へかけさせ給ふて、かの鳥けだもの、ちくしやうのがうをたちまちにてんじて、らいしやうをたすけ給ふ。これを以て、大じひの御ちかひなり。されば、あくうきやうもんにいわく、「がうじんうじやう、すいはうふせう、こしゆくにんじん、どうしやうぶつくわ」。され共、すわの御かりをまなび、小鳥の一つもこらす事なかれ（「正保本」）

- (31) 千葉徳爾氏は鹿兒島地方には鎌を神体とする諏訪神社が多いことを『薩隅日地理纂考』第八巻より指摘されている。千葉氏「諏訪の神人について」（『信濃』第一五卷三号、昭和三十八年）。

- (32) 『国文仏教東方叢書』第二輯法語部上。

- (33) 『法然上人絵伝 中』（続日本絵巻大成2、中央公論社、昭和五十六年）。三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』（平楽寺書店、昭和四十一年）五二五頁。時頼の念仏信仰については実際のところは明らかでないが、三田氏は時頼の兄経時が良忠の帰依者であったことを指摘されている。また、川添昭二氏は永仁四年（一二九六）一月二十三日の「浄光明寺真阿彌状」（『鎌倉遺文』第二五巻、一八九六九号）に、長時とともに時頼が本願主としてみえることなどより、時頼が法然流の念仏に接

していたのは事実であろうとされる。同氏「北条時頼の信仰」（『法華』第六五巻四号、昭和五十四年）。浄光明寺については『神奈川県の地名』（平凡社、昭和五十九年、三三四頁）参照。

- (34) この「吾妻鏡」の臨終記事については偽作、捏造説がある。平泉隆房「吾妻鏡編纂過程の一考察」（『古文書研究』第一六号、昭和五十六年）。
- (35) 『今昔物語集』巻一一ノ二八、『古今著聞集』巻二（四〇）、『元亨釈書』巻一五。

- (36) 『国文仏教東方叢書』第二輯法語部上、七五―六頁。「肉を食する由しをば現じ玉ふ。実には食し玉ふべからず。いかんとなれば、本地はみな慈悲広大の仏菩薩にして、生をあはれみ殺をにくみ玉ふ故也。こゝを以て涅槃經の第四に云、迦葉我從今日制諸弟子、不得食一切肉也、迦葉其食肉者、若行若住、若坐若臥、一切衆生聞其肉氣、悉生恐怖、喻如有二人近師子、已衆人見之聞師子臭、亦生恐怖、善男子如人啖蒜、臭穢可惡、余人見之、聞臭捨去、設遠見者、猶不欲視、況当近之、諸食肉者、亦復如是、一切衆生聞其肉氣、悉皆恐怖、生畏死想、水陸空行有命之類、悉捨之走、咸言此人是我等怨、是故菩薩不習食肉、為度衆生、示現食肉、雖現食之、其実不食、善男子如是、菩薩清淨之食猶不食、況当食肉已上、といへり。此經に、菩薩為度衆生、示現食肉、其実不食といへる」。

- (37) 『大日本仏教全書』興福寺叢書。

- (38) 千葉氏「民間狩猟の作法にみられる諏訪信仰」（注29）。

- (39) 千葉氏「諏訪の鹿食免について」（注29）。

- (40) 千葉氏「狩獵伝承研究」一七六頁（注29）。

- (41) 拙稿「鎌倉仏教における神と仏―「大明神」号の成立と展開―」（『論集日本仏教史―鎌倉時代』、雄山閣、昭和六十三年）参照。